

役割広がり人数不足が課題に

病院薬剤師の業務は年々拡充し、その内容も高度化してきた。現在は病棟にも頻繁に足を運び、より患者に近い位置で、医師や看護師と連携を図り、適正な薬物療法が実施されるよう支援する役割が強まってきた。しかし、十分に役割を果たすには、欧米と比べても薬剤師数は不足しており、マンパワー増強が課題となっている。

1990年代に本格化した医薬分業の進展に伴い、外来患者の調剤業務は病院薬剤師の手を離れた。診療報酬の後押しもあって、病院薬剤師は病棟に出て、入院患者に対する業務を行う機会が次第に増えた。当初は、患者に対するベッドサイドでの服薬指導が中心だったが、必然的に病棟で医師や看護師との関わりが増え、現場の患者の薬物療法適正化に、薬剤師が深く関わるようになっていった。

最近では、まだ多くはないが、病棟に薬剤

師を「常駐」させる病院も増えつつある。さらに集中治療室や手術室などにも進出しつつある。従来の「病棟の医療チーム」に、薬剤師も加わり、その専門性を発揮し始めている。

各診療科を横断的に担当する医療チームでも、薬剤師は存在感を示している。院内感染対策、栄養サポート、緩和ケアなど各種チームの一員として病院全体の基準や対策を考案。主治医の依頼を受けて病棟回診も行う。

病院薬剤師

業務の高度化を背景に、日本病院薬剤師会や各学会が主体となって各領域で専門薬剤師・認定薬剤師制度が制定されつつある。癌化学療法、感染制御、精神科、妊婦・授乳婦、HIV感染症などのほか、救命救急、腎臓病などの領域でも制度構築が進んでいる。

近年、病院薬剤師が聴診などフィジカルアセスメントを行って、薬の有効性や安全性を評価する取り組みが注目されている。2010年4月には厚生労働省医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」で、それらの取り組みが現行法下でも薬剤師が担えることが示された。

このような個々の患者への業務をさらに推進するには、十分な薬剤師数を確保することが必須。日本病院薬剤師会は、12年春の診療報酬改定で病棟への「薬剤師の常駐」が評価対象になるよう働きかけを強める考えだ。人員増の追い風になることが期待される。

東京厚生年金病院

三宅 久美子さん
小池 愛さん

東京厚生年金病院薬剤部に勤務する三宅久美子さんと小池愛さんは、病院薬剤師としてそれぞれ3年目と2年目を迎えた。現在は入院患者の調剤、注射薬の無菌調製や医薬品の発注業務、持参薬確認など忙しい日常業務の合間に病棟業務に力を注ぐ。患者との関わり合いにやりがいを感じる毎日だ。

病棟業務で職能発揮

三宅さんが目指したのは研究職。小池さんも創薬へ興味を持ち薬学部へ進んだ。しかし2人とも、学部時代に病院実習を経験、薬剤師が多職種とチームを組み患者の治療に当たる姿を目の当たりにして、次第に臨床への興味が沸いた。大学院へ進み、臨床薬学を研究した後、病院薬剤師になったという。

三宅さんは病院薬剤師の道を選んだ理由を「実習中、患者さんの経過を毎日見ながら関わることがとても印象深かった。これは病院ならではの経験だと感じた」とし、日々、患者に接する点を魅力に思っている。

入職3年目の三宅さんの朝は、製剤室での抗癌剤ミキシングからスタート。昼から医薬品庫で注射薬の払い出し、翌日の注射薬セッ

ト、医薬品の発注などを実施する。

2年目の小池さんは、午前中は調剤、持参薬の鑑別がメインだが、朝早く出勤したり空いている時間を見つけて電子カルテをチェック、患者情報を収集し、午後にはできるだけ病棟へ上がって服薬指導などを行っているという。なお、2人とも月1回は夜勤をこなす。

同院では、入職1年目の秋頃から病棟に行き始め、患者のベッドサイドで服薬指導などを体験する。それぞれが担当病棟を持ち、各病棟を順番に経験していく。小池さんは「日々勉強だが、早い時期からいろいろと経験できる環境はありがたい」と話す。同院では病棟常駐体制にないが、積極的に病棟へ行くことは歓迎されている。そこで薬剤師は、各自の業務をこなしながら、時間をやり繰りして病棟へ行っているという。

三宅さんは「薬物治療に関わる上で、患者さんと直接話し、副作用の有無や薬の効果を聞くなど、生きた情報に触れることができるのが魅力」と指摘。「病棟業務は、まさに薬剤師の腕の見せどころ」と語る。

病院薬剤師の難しさについて、三宅さんは

実習経験し、病院薬剤師の道へ



左から三宅さん、小池さん

「とにかく日々勉強。医師と対等に話すには、症例などを深く知る必要がある。薬に関してどの職種より詳しくなければならぬ」とし、勉強会への出席などは欠かせない。

今後の目標と後輩へのメッセージとして、三宅さんは「多くの症例を勉強し、自分の専門分野を見つけ、それを極めていきたい。病院薬剤師は他職種と連携しながら、薬学的な専門知識を生かせる場。とてもやりがいがある。実習先の病院などで、積極的に先輩たちに質問してはどうか」とエールを送る。

一方、「まだ専門分野はしぼり切れていない」と話す小池さんは「各病棟を経験し、そこで勉強したことを生かして治療設計に関わりたい」と展望する。また、「まだ病棟でバリバリ働ける薬剤師はそれほど多いわけではない。やる気がある人にはどんどん出てきてほしい」と後輩にメッセージを送る。



臨床検査にて培った 医療機関とのネットワークを通じて 調剤薬局事業を展開しています。

薬剤師の育成を第一に考え、充実した教育研修制度を構築するとともに、最新の調剤過誤防止システムや電子薬歴管理システムを導入するなど、IT化を積極推進し、社員にとって働きやすい職場環境を整備しています。医師、患者様はじめ地域の皆様から高い信頼と満足度を得る、地域の「かかりつけ薬局」として展開しています。

ファルコSDホールディングスグループ
株式会社 ファルコファーマシーズ

本社 / 〒604-0911 京都市中京区河原町通二条上る清水町 346 番地 TEL (075)213-1621 FAX (075)213-1653

<http://www.falco-pharm.co.jp/>

